

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-004	台湾における風水を初めとした占術文化及び民族宗教に関する 思想文化史的・文化人類学的研究		
	台湾	中央研究院民族学研究所	2000.11 ~
	水口拓寿	東京大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

東アジアにおける占術文化や民間信仰に関する研究は、第1に思想文化史学の方法により、歴史上の漢籍に依って行われてきたが、日本の先行研究には、こうした文化に言及した史書などの記載に触れたものが多い一方、風水書・相書・善書など古典的な性格を持った文献の分析は、日本で閲覧できるものが乏しいため等閑にされてきた。この研究は第2に、文化人類学の方法により、フィールドワークを通して行われてきたが、先行研究は世界的に、中国由来の伝統的な高文化に関する知識や漢籍の読解能力の不足から、占いの依頼者や寺廟などの参詣者の行為や意識を対象とするに留まってきた。

これらの問題に対し、台湾は対岸の中国大陸福建省と合わせて1つの文化圏を構成し、占術文化や民間信仰に関して東アジアの中心を務めてきた地域であり、同地の蔵書機関には上記のような文献資料が前者後者ともに豊富である。また、私は文化人類学と思想文化史学を早くから兼修してきた者であり、占術家や宗教職能者の行為や意識をも調査の対象とすることが十分にできる。同地ではこうした文化が弾圧によって致命的な打撃を受けたことがなく、フィールドワークの主題としても許可を得ることが容易である。

氏名：水口拓寿

所属：東京大学大学院人文社会系研究科

留学先国：台湾留学先機関：中央研究院民族学研究所

留学期間：2000年10月～2002年10月

【研究テーマ】

台湾における風水を初めとした占術文化、及び民俗宗教に関する思想文化史的・文化人類学的研究

【成果報告】

小生は2000年11月に、台湾台北市の中央研究院民族学研究所における留学を開始いたしました。国立研究所であります中央研究院には教育機関としての性格がございませんので、研究院に所属する台湾人学生というのは基本的に存在いたしません。しかしながら、ほぼ同年輩・同学歴の面々が「助理」（日本でいう助手や副手です）という身分で多数在籍しており、院内では彼らと事実上の同級生として交友しておりました。11月中は、研究院内外の学会に頻繁に出席し、当地の研究者や大学院生と知り合うことに努めておりました。11月から12月にかけては同時に、台湾で近年出版された民間信仰関係の研究書を集中的に読破し、当地における研究の最新潮流の摂取に努めておりました。

12月から、中国語（北京語）訓練の「仕上げ」に取りかかるべく、院内の助理のうち日本語学習者4名と中国語－日本語の相互講習を開始いたしました。本年1月より、昨年までに中国大陸福建省の文化人類学的調査にて収集しておりました、福建省に発祥して台湾などにも居住者を広げる「客家人」（漢民族の一派）の「族譜」（一族の系譜や伝承を記した書物）を一方の資料とし、中央研究院各研究所図書館所蔵の一次史料類及び研究書籍を一方の資料として、論文「福建上杭《李氏族譜》に見る風水観念：始祖の墓をめぐる「機械論」と「人格論」」を執筆いたしました。本論文は、小生の主要研究課題の一つであります「風水」と呼ばれる占術を扱ったもので、福建省上杭県を本籍とする李氏一族が『李氏族譜』に纏めた伝承群にケースを求めて、風水的な命運観や祖先観、また一族を心理的に結束させる手段としての風水関係伝承の機能をモデル化したものです。

2001年1月末の「春節」（旧暦元旦。台湾では旧暦にて新年を祝います）休暇には古都・台南（日本統治時代の直前まで首府が置かれておりました）へ赴き、大天后宮や孔子廟を訪問いたしました。

4月からは第2篇目の風水関係論文として「日出ずる処の風水説：聖徳太子伝説を手がかりに見る日本古代風水文化史」を製作しておりました。それと申しますのも、当地にて東アジアの風水など占術をめぐる一次史料類や研究書籍を探索しておりますうち、日本平安時代における中国及び朝鮮からの風水伝来課程や、その受容の社会的背景について、小生の中で従来の定説への違和がいよいよ明確となりましたため、留学直前に東京大学大学院人文社会系研究科「多分野交流演習」などにて中間報告まで発表しておりました研究に一応の完成を与えるべく、このテーマに臨時に取り組むに至った次第です。4月から6月にかけては、並行して台北大学社会学系におけるゲスト講義の準備を進めておりました。これ

は、指導教官林美容研究員の担当講義のうち1日（約3時間）を割いて、日本社会に関する人類学的講義をするよう拜命しましたもので、親族組織や「家」の観念や道徳に関して台湾社会と日本社会を比較検討するという趣旨にて内容を構成してみました。6月上旬に同大学へ赴いて、中国語にて講義を行い、最後に30分間を設けて学生の皆さんとの質疑応答や対話を行いました。

6月から7月にかけては、風水文化史・歳事的民間信仰行事に関する文献資料の収集・読解にあたる傍ら（この営為は、常に継続しております）、人口の大半を占める福建系住民の生活言語「台湾語」の学習に重点を置いておりました。民族学研究所は研究の対象や方法の特徴上、中央研究院の中でも特に台湾語の話者が多いところですが、また台湾ではテレビ番組に中国語（北京語）ではなく台湾語が使われる場合も多く、なおかつ必ず字幕が付きますので、講師を務めてくれている研究院の助手さんや教科書によって学ぶ以外にも、練習や慣れの機会を豊富に得て参りました。

7月末から8月初めにかけて、台湾東部の花蓮を旅行いたしました。花蓮の街に近い観光地・太魯閣溪谷へは、交通手段が不便なためホテルから出ているツアーに加わって赴きました。中国語によるガイドを受けながら、台湾流のツーリズムというものを観察するという意義もあったと思っております。8月下旬から9月上旬、すなわち旧暦7月は、祖先や「鬼」（日本の幽霊に近い）が「陰間」（あの世）から「陽間」（この世）へやってくる期間で、小生は「中元節」（盂蘭盆会などとも称します）の調査にあたっておりました。片や、指導教官の林美容研究員のご紹介を得て、台北市内の保安宮にて、旧暦7月14日の歴代横死者に対する救済儀礼を取材したり、儀礼の執行者「道士」や参拝者にインタビューしたりし、片や基隆市内の中正公園・基隆港・慶安宮・老大公廟に足を伸ばして、旧暦7月15日の「普渡」儀礼その他を取材し、寺廟の管理者を中心にインタビューを行いました。前者は伝統的な儀礼が、比較的忠実に今日まで伝わった例として、後者は市ぐるみで「中元祭」として大々的に、観光性も帯びて開催される例として注目した次第です。

9月下旬には、国立台湾大学歴史学系の『台大歴史学報』に掲載される書評：「井上徹著《中國的宗族和國家禮制：從宗法主義之觀點來分析》讀記」（井上徹著『中国の宗族と国家の礼制：宗法主義の視点からの分析』、研文出版より2000年刊行、によります）を書き上げて提出し、27日には市内の孔子廟で行われた、孔子の生誕祭「釈奠」を参観しました。但し、本番は明け方に開催されるため南港区から駆けつけるのは難しく、また政府要人が多く臨席するため会場内での移動や写真撮影が不自由になることが予想されましたので、前日の予行演習に、予約の上で赴きました。むしろ、あくまで予行演習という名目の場であっただけに、儀礼上の細則や慣習について、関係者にリアルタイムで質問できたという利点がありました。台北孔子廟は台北市の管理下にあり、儀礼の「主祭官」は台北市長が務めるのですが、今年から儀礼の格式が従来の「諸侯」級から「天子（皇帝）」級に引き上げられたこと、またこの変更が市長の政治的野心という話題に付会されて、一般の新聞やニュース番組にも取り上げられたことに小生は注目しました。台湾社会の特徴として、大都市部においてすら種々の漢

人古典文化が現代文化と高度に共存させられ、前者の現代社会的・都市的応用や再解釈も盛行していることが挙げられますが（例えば中国医学や風水説です）、孔子廟における王朝時代以来の儀礼もまた、政権・民衆の両方にとってアクチュアルな存在であり続けているというわけです。小生はこれを興味深い現象であると考え、10月上旬には関連資料の収集を試みました。

12月中旬には、某家の大規模な葬礼を一部始終取材し、火葬や葬礼終了後の供物焼却にまで同行しました。一族の方々より、親切に受け入れていただけましたので、一族の方々や近隣の参列者、宗教職能者「法師」、音楽隊などにも頻繁にインタビューすることができました。一般に葬礼は、他の儀礼と異なりなかなか立ち入らせてもらえないため、取材が難しいのですが、今回は少なからず都市型・現代型に変化した儀礼を、同家や同地区における伝統的な式次第についても情報を得ながら、密着的に調査できたのが大きな収穫でした。

2002年2月中旬は、漢民族が新暦の正月よりも盛大に祝う旧正月「春節」に当たっておりました。私は香山聡子氏とともに、我々共通の指導教授であります林美容先生のお招きを受け、台湾中部の南投県草屯鎮にある林先生のご実家を泊まりがけで訪問しました。ここは林先生をはじめとして少なからぬ文化人類学者が調査地として選びました場所で、滞在中は林先生ご一家との交流を通して、漢民族家庭の旧正月関連行事に参加し観察することができたのみならず、ご一家の方々に案内していただいたり、寺廟参拝に同行したりする形で、主に現地の民間信仰の現状について、私がこれまでに読みました論文や調査報告の内容とつき合わせつつ視察する機会を得ました。

3月には中国風水協会顧問で台湾大学地理学系助理教授でもある趙建雄先生を初めて訪れ、まずは台湾の地形に関して風水地理的な解説書も執筆される趙先生ご自身を取材対象として、現代台湾の風水師における職能知識の流通状況や、こうした「知識の流れ」と古典的な風水地理書の流通との並行関係について問答しておりました。趙先生との接触を通じて、私の研究活動のうち文献収集とその解析については、風水地理書を多く蔵する機関や、各機関に蔵された主要なものについて大いに教えを受けることとなりましたが、一方で私が当初から期待しておりましたような、現代台湾の風水師たちにおいて古典的な風水地理書が未だ教科書あるいはマニュアルとして現役であり、彼らが個々の古典文献を知悉しているという状況は、その実かなり実態にそぐわない旨、風水地理文化研究の先達として忠告を受ける結果となりました。

4月初旬のことでしたが、台湾の年中行事を列挙解説した書物を複数ひもとして、主に寺廟や民間信仰に関わる興味深い行事を物色しておりましたところ、ある1冊に春4月の行事として孔子廟の「春祭」が紹介されているのに目が止まりました。なおかつ、台北孔子廟でも行ってきたと記されております。前回のご報告に申し上げました通り、私は昨秋に台北孔子廟で行われた、孔子の誕生日を祝う「釈奠」儀式を参観しまして以来、孔子祭祀という活動や孔子廟という儀礼空間に強い関心を持つようになりま

した。台北孔子廟で行われる孔子祭祀行事は1年に1度の「釈奠」のみのはずでしたので、私は直ちに管理委員会へ電話をかけ、果たしてまもなく「春祭」があるか否か問い合わせました。回答は、「春祭」は政府機関としての台北孔子廟は主催せず、ゆえに定期行事には数え入れないが、民間から要請と出資があった場合には行う場合があるというもので、おのずから行わない年が多く、今年も行わないという内容でした。つまり、「春祭」の実態調査は不可能と決まったわけですが、この問い合わせを機に管理委員会執行秘書の杜美芬氏の知遇を得たのは大きな収穫でした。これ以後、台湾の孔子祭祀に関する資料や情報について杜氏より教示を受けるようになった次第です。

私は資料収集能力の関係から、孔子祭祀や孔子廟という研究テーマを一度はあきらめつつあったのですが、杜氏のご助力により様々な資料を知る道が開け、また杜氏を初めとする台北孔子廟やその儀式活動に携わる方々にお会いできるようになりましたため、改めてこのテーマに取り組もうと決意し、直ちに実行に移し始めました。孔子祭祀は民間信仰的な要素よりも、むしろ国家イデオロギーや儒学思想の表現という性格が強く、台北をはじめとした台湾各地の孔子廟は多くが官立で、すべて私立である他の寺廟とは一線を画しています。しかし、国教的な思想や人脈（国家公務員としての職員や、釈奠儀式の執行権者としての市長や民政局長、また多く国立の学術機関や博物館から迎えられる顧問たち）と地域密着型の民間信仰的思想（受験合格祈願など）や人脈（儀式の作法を教授する古老たち）が連携しあう場、儒教経典・漢詩・書道などの教室によって古典文化の伝授が図られる場などとして、孔子廟は「寺廟におけるhigh cultureとfolk cultureの接触・仲介」という大テーマに沿った場であり、それゆえ今回貴財団から奨学金をいただいて研究を行うに相応しいと判断いたします。

5月には、台湾南部の雲林県にあります北港朝天宮に赴きました。ここは台湾で広汎に進行されている女神「媽祖」を祭る、最古の寺院であり、媽祖の誕生日を祝う巡礼活動「進香」や、台湾全土から集結した媽祖像のパレード「巡境」を視察・調査しました。また、近隣の大都市・嘉義県嘉義市に立ち寄って孔子廟を訪問しました。月末には、台湾大学歴史学系の甘懷真先生よりお誘いを受け、「日本の『家』と漢民族の『家』：家、国家、家業、家元」という題で研究発表をいたしました。

7月中旬からは孔子廟管理委員会の杜氏との連絡をより密にし、8月上旬にはご紹介を得て、台湾中部の彰化県彰化市を訪れました。主な行先は八卦山大仏殿の1階として設けられた、孔子を祀る聖堂「大成殿」で、台湾で唯一であるという孔子像の開眼儀式の実地調査を目的としました。一般に、儒教あるいは儒教的な孔子崇拜では神像を用いず、祭壇には位牌が置かれず、事務長氏のご厚意により、入場を許された数少ない取材者の一人として、一部始終に立ち会うことができました。儀式終了後は、主に事務長氏にインタビューに応じていただきました。台北に戻ってからは、台湾語能力をさらに高めるため、毎週1度台北孔子廟の文教施設「明倫堂」で開かれる教室に通うようになりました（孔子廟には伝統的に学問所が付属する習わしであり、ほぼ必ず「明倫堂」と呼ばれます）。このため定期的に同廟へ赴くことになりましたので、以後はこの機会を利用して、留学期間の満了までほぼ必ず同廟管理委員会

執行秘書の杜美芬氏にお会いし、同廟の特に儀式の沿革についてお話を伺ったり、資料その他について教示を受けたりいたしました。杜氏はご自身も博士論文を執筆中であり、我々は共通の利益のもとに、中央研究院内の各図書館、また戦前の書籍・写真や新聞を多く収蔵する中央図書館台湾分館や国立博物館へ、同じく留学期間いっぱい、たびたび一緒に資料検索に出かけました。戦前の新聞は、日本語によるページと中国語によるページが混在している場合が少なくなく、同じニュースでも内容の重点がえて違ってまいりますので、それぞれの母語による記事を分担して収集し、後で対照するという作業が有用になるのです。

9月は月末28日の孔子生誕祭「釈奠」を控え、台北孔子廟は連日の準備作業や、関係者各部門の練習に追われておりました。小生はフィールドワークとして、準備期間を含めた一連の活動に立ち会い、随時に質疑応答を行うことを許されたばかりでなく、かなりの特例だそうですが自らも儀仗隊「礼生」の一員として参加できる運びとなりました。このため

「礼生」、
や関係者全体の練習に出席する必要もあり、
頻りに台北孔子廟に赴いておりました。儀式の数日前からは、毎日密着的なフィールドワークを行い、特に前日から当日にかけては寝袋持参の泊まり込みで孔子廟に常駐して、祭具や供物の陳列や儀式の予行演習に加わりました。儀式の本番は28日の未明に始まり、孔子の祖先を記念する「崇聖祠家祭」に続いて午前6時からメイン・プログラムの「釈奠」が行われました。終了後も小生は片づけ等に協力しながらフィールドワークにあたり、管理委員会主任で儀式中は「糾儀官」を務められた林正修民政局長や、「奉祀官」を務められた孔子77代嫡孫孔徳成氏にお会いする機会も得ました。「礼生」の指導役であり儀式全体の指揮もなされた呉炳仁氏や、儀式音楽の指導にあたられた孫瑞金氏には、この後も幾度となくお目にかかり、ご教示を頂きました。この月は旧暦7月中旬と重なる部分があり、小生は孔子廟での研究活動の合間に、孔子廟に隣接する寺廟「保安宮」の盂蘭盆会（中元節）行事を視察しました。ここでは昨年に詳細なフィールドワークを行ったことがあります。当時お世話になった道士さんたち（道教の聖職者）と再会を喜び合いました。

10月には、厳密には9月末が〆切でありました東京大学中国哲学研究会『中国哲学研究』（池田知久主任教授御勇退記念号）に投稿するべく、「人格としての祖先、機械としての墓」と題する論文を完成させました。これは、留学開始直後より一貫して追いつけておりました、風水地理説における墓地の地形論と、墓の主である祖先に対する認識論について、台湾で得た資料を大いに活用しつつ新たな統合的理解を試みたものです。また、勉誠社『アジア遊学』誌の特集「風水の伝統と現代」（東京都立大学の渡邊欣雄先生主宰）に、「『葬書』：風水思想の古典」と題して寄稿いたしました。同月30日に、2000年11月4日の日本出発以来2年に及んだ台湾留学に区切りを付け、日本アジア航空便にて関西国際空港に無事帰着いたしました。

貴財団「松下アジアスカラシップ」の奨学生として、2000年11月初めの出発から2002年10月末の帰国まで台湾の中央研究院民族学研究所の訪問学員でありましたことの成果を、現時点では以下のように列挙申し上げます。もちろん、これはあくまで現時点でご報告できるものに過ぎず、現地で得ました資料や知見を用い、博士論文を初め帰国後のこれから執筆してゆく予定の論著が既に複数あります。また小生は今後も繰り返し台湾を訪問し、文献の博搜やフィールドワークを発展させてゆく所存ですので、去る2年間の留学では必ずしも直接には研究業績というほど形になりませんでした覚え書きやメモ、また人脈等も、ゆくゆくは今後の業績の礎石として十分に活用されてゆくものと確信しております。

論文等

- 1 「福建上杭《李氏族譜》に見る風水観念」文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アジアの民俗宗教に関する宗教人類学的研究」（佐々木宏幹代表）研究成果報告書所収2001年3月
- 2 「日出ずる処の風水説」小島毅編『東洋的人文学を架橋する』（東京大学大学院人文社会系研

究科多分野交流プロジェクト刊）所収2001年7月3 「人格としての祖先、機械としての墓」『中国哲学研究』誌・池田知久先生御勇退記念号（東京大学中国哲学研究会刊）2003年2月4 「『葬書』」『アジア遊学』誌（勉誠社刊）2003年1月

口頭での研究発表 1 「日本社会人類学概述：以「家」的概念为核心作華日之間的比較」（中国語使用）国立台北大学社会学系にて、林美容客員教授講義「文化人類学」の1回として2001年6月2 「日本人的「家」與華人的「家」：家、國家、「家業」與「家元」」（中国語使用）国立台湾大学歴史学系にて2002年5月

書評 1 「井上徹著《中國的宗族和國家禮制：從宗法主義之觀點來分析》讀記」（中国語使用）『台大歴史学報』28（国立台湾大学歴史学系刊）所収2001年12月2 野口鐵郎ほか編『講座道教5 道教と中国社会』への書評『東方宗教』（日本道教学会刊）2002年6月

語学能力

留学開始当時は、まだ不自由の残っていた中国語（北京語）会話は、留学開始から半年後にこちらの先生方から「十分な能力を有する」と言われるようになりました。こうして一段落した中国語の訓練を引き継ぐ形で、2001年8月から有力な方言である台湾語を学習し、現段階で中級教科書を学び終えております。中国語と台湾語は、日本語における標準語と各地の方言以上に差異があり、

中国語の知識だけを持つ者が、自然にマスターできるものではありません。フィールドワークを行う者として、この台湾語の習得は大きな有利となります。中国語・台湾語ともに、中央研究院の同年輩の助手さんを相互教習の相手として訓練しました。小生が日本語を教える時間であっても、中国語を使って日本語文法を解説する必要があり、教科書を使いながら中国語の指導を受ける時よりも、むしろこの時に鍛えられるところが多かった感があります。

現地への貢献

- 1 中央研究院民族学研究所林美容研究員・葉春栄研究員のための、文献翻訳や翻訳補助留学期間を通して随時
- 2 中興大学陳桜琴教授及び令嬢のための日本語指導・文献翻訳2001年12月－02年3月
- 3 台北孔子廟杜美芬執行秘書のための、資料収集協力や文献翻訳2002年8月－10月
- 4 台北孔子廟釈奠儀式において儀仗隊「礼生」に参加、各種準備の手伝い2002年9月

末筆ながら、貴重な奨学金を賜りました貴財団に、この場をお借りして改めて心よりお礼を申し上げますとともに、これからのますますのご発展をお祈り申し上げます。また、上にも申し上げたことですが、小生は2年間の留学経験を「過去の出来事」として死蔵してしまうことなく、今後も台湾をめぐる研究活動や台湾の人々との交流・貢献に勤しむことによって、留学時に得た資料・知見や人脈等にさらなる花を咲かせてゆきたく存じております。そうであってこそ、小生は貴財団のご期待に真にお応えできるのであらうと考えております次第で、つきましてはこの旨を誓言して、ご報告を閉じさせていただきます。2年間、誠に有難うございました。



台北孔子廟にて、孔子生誕祭「釈奠」に参加しているところです。
中央の、柄付き香炉を捧げているのが筆者です。